

不如速涓吉納幣、使善次閱曆、曰、某日吉矣、於是衆歡飲徹夜、阿正向隅哭泣而已、自是梳粧皆廢、家慮其有變、更守之、既而數日、阿正忽洒然收淚、稍理髮、面家意其改志、防護寢解、阿正乘間、沐浴裝束、入屋後炭轍、以厨刀貫咽、兩手據膝、伏而死、時年十八矣、義母方識、覺其不在、詶之隣、隣曰、近久不見二姐也、歸家周搜、遇流血淋漓、大驚、嘉右時他適、聞變馳至、得遺書二於傍、其一、以遺義父母○中、其一、以遺長二、曰、妾身許郎君、不須更言、近乃遭勸、適勝浦、納幣有日、妾不任悲愴、昨託人欵說、一切不聽、所託之人、亦反來勸妾、無復有一人贊適郎君者也、妾於是殊覺郎君可痛也、饒使妾遂成不義之婚、身披錦繡、口飽肥甘、獨何面目見人乎、義父謂妾與郎君通殷勤、亦宜然之疑矣、然實未嘗伸、一夕之情、郎君所知也、特思許嫁義重、又欲有辭於逝者、思彼念此、万愁纏心、所以自殘、冀見憐察、嘉右撫然○中、實享和辛酉十一月也、物論囂然而莫敢上聞、其後十有八年、本藩儒臣竹田器甫、嘗因臨館試詩、以節女詞命題、自賦長韻、悉叙其事、藩侯閱詩、心異之、因密詢中外、侯生母賢而有惠、其所隸小婢、亦問人也、呼而近之、訪得其實、語之於侯、侯遣吏廉問、遂奪兩村長職、追咎當時郡宰以下、黜罰有差、賜節女家白金、使存卹焉、以旌之云。

〔閑田耕筆〕丹波桑田郡小林村とて、龜山ちかきに、木匠某が妻長といへる有夫婦が中に女子二人ありて、いまだ幼きほど、夫は江戸大火後、造作多きをたのみて下りしが、終にかしこにて妻をまうけ、音信もせざるに、妻は操を守りて、二人の女子を養育して、縫針洗濯の貢業をして、貧き世を堪忍びぬ、さて夫の愛せし櫻一樹、庭外にあるを形見と守り、夫に仕ふる心地に、木のもとを清め枝をいたはり、假初にも人に折することなし、がくすること二十年許、樹はます／＼榮へ、二女も生長して、それ／＼に身も納りぬ、かくて此婦身まかりける後、櫻忽に萎み衰へたり、よりて心ある人は、呼て操櫻と稱す、

〔近世畸人傳〕櫻者七兵衛妻